

気軽に散歩      (福岡県・門司港)

関門海峡に面する門司港は大正 10（1921）年に欧州航路の寄港地となり、多くの外国人がこの地に降り立った。レンガ造りの異国情緒ある建物が多く残り、北九州エリアの主要な観光地として親しまれている。

J R 門司港駅で下車。本州と九州を結ぶ関門橋を見ようと、海の方へ歩く。海辺に出て、本州が思いのほか近い事に驚く。最も狭い所で 500 メートルの海峡を、大きなコンテナ船が次々と通っていくのに感心する。

行き交う船を見ながら歩いていると、跳ね橋「ブルーウイングもじ」が見えてきた。この橋は、日本唯一の歩行者専用の跳ね橋で、1 日 6 回、定刻に 20 分間開く。その時を今かと待っていると、アナウンスの後、ゆっくりと開き始めた。跳ね橋自体を見るのが初めてのため、見ているだけで楽しくなってきた。

今度は橋が閉まるのをじっと待つ。ちなみにこの橋は閉まった後、一番始めに渡りきったカップルは永遠に結ばれるというジンクスがあり、「恋人の聖地」に指定されている。カップルが渡るのかと少し緊張しながら待っていたが、この時は犬と散歩中の地元の人が最初に渡り、がっかりしたような、安心したような複雑な気持ちになる。

跳ね橋を渡って岸壁をぐるりと歩いた後、「旧門司三井倶楽部」に立ち寄ることにした。ここは、大正 10（1921）年に三井物産の社交場として建てられた。ヨーロッパの伝統的な建築技法が用いられ、各部屋には暖炉がある。また、庭先には赤やピンクのバラが咲き、より優雅さを感じさせてくれる。

木製の白いドアを開け、中に入る。現在では 1 階はレストランやイベントホール、2 階は展示室として使用されている。この日もレストランの利用客や、展示室を見にきた修学旅行生でにぎわっていた。階段をゆっくり上がり、2 階へ行くと「メモリアルルーム」が。ここは、大正 11（1922）年に物理学者のアインシュタイン博士が来日した際に、5 日間宿泊した部屋である。当時の様子が再現され、複製だが博士が書いた手紙やサインを見ることが出来る。

絶えず船が行き交う関門海峡の景色と、ヨーロッパの空気を味わうことができる門司港。入港した際に歩いてみてほしい。

「海員だより」